取手市埋蔵文化財センター第４回企画展

取手ゆかりの人びとの書

平成13年７月３日（火）～８月31日（金）

○午前10時から午後４時30分（入館は４時まで）　○月曜日休館　○入館無料

沢　近嶺

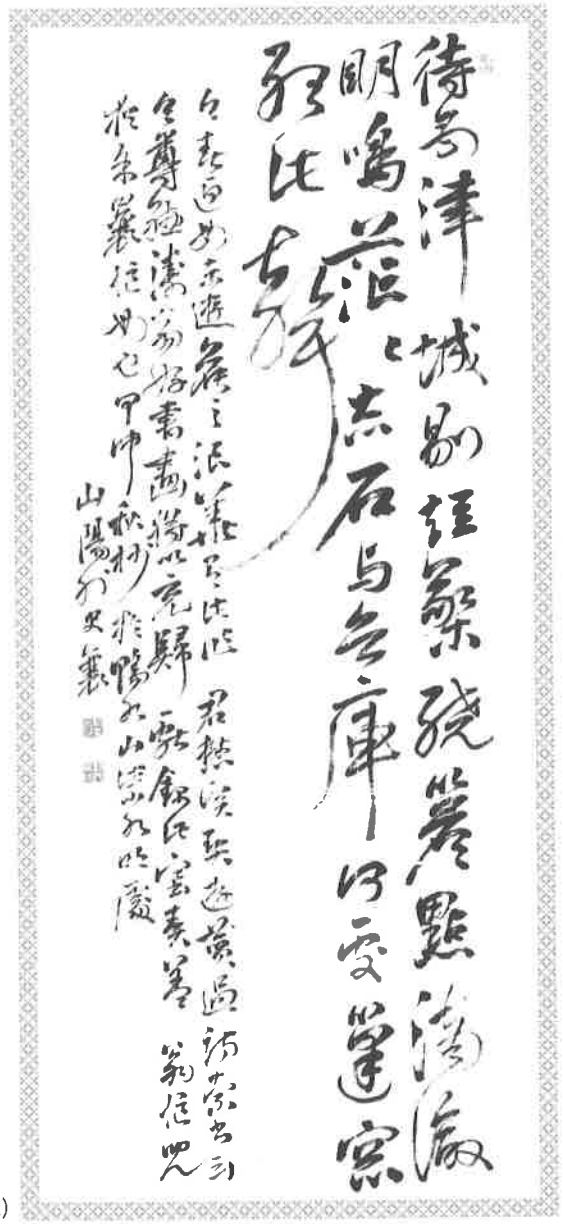
頼　山陽

市河米庵

勝　海舟

重野安繹

土方久元



頼山陽書（取手市教育委員会所蔵）

高村光太郎

写真提供　北川太一氏

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007　取手市吉田383

TEL　0297-73-2010

FAX　0297-73-5003

駐車場あり

交通

取手駅東口から大利根交通バス吉田バス停下車、または関東鉄道バス竜ヶ崎、江戸崎、光風台行で青柳南バス停下車、どちらからも徒歩約10分

開催にあたって

この度取手市埋蔵文化財センターでは、第４回企画展「取手ゆかりの人びとの書」が開催されることとなりました。

平成６年に取手市は、故海老原光義氏より江戸時代後期の儒学者として有名な頼山陽の書や、幕末の三筆として名高い書道家である市河米庵の扁額などの寄贈を受けました。また平成10年には、中村春樹氏より詩人であり彫刻家であり名筆家でもある高村光太郎の書簡の寄贈を受けています。今回はじめてこれらを公開して、ひろく皆様に鑑賞していただく機会を設けることができました。

頼山陽の書は、海老原家の先祖の喜右衛門が京都に頼山陽を訪ねて揮毫してもらったものであり、美術品として購入したようなものではありません。同じく市河米庵の扁額も、米庵の父市河寛斎に弟子入りしていた関係から伝えられたものであり、喜右衛門を山陽に紹介したのも米庵でした。高村光太郎の書簡は、詩人宮崎稔氏にあてたもので、取手の発展に功績のあった篤農家の父仁十郎氏をふくめて、戦前から家族ぐるみの交際がありました。光太郎の紹介で昭和20年の暮れに稔氏と結婚した春子は、光太郎の妻智恵子を看護したその姪です。

このほかにも、江戸時代の取手が生んだ国学者沢近嶺と、取手に生きた人びととのつながりの中で伝えられてきた歴史に名をとどめる著名な人物の書の作品を展示して、知られざる取手の歴史に光をあてたいと考えています。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたりご協力をたまわりました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成13年7月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「取手と高村光太郎」

北川　太一　氏　　文芸評論家、高村光太郎記念会事務局長、高村光太郎全集編集者、高村光太郎研究の著書、論文多数執筆

日時：８月25日（土）午後２時から３時30分　　場所：埋蔵文化財センター２階講座室

定員：40名（当日受付順）

展示説明

７月14・15・28・29日、８月11・12・25・26日の午前11時と午後２時の２回、ただし８月25日は午前のみ、予約不要、当日展示室においでください。

例言

1．このパンフレットは、平成13年７月３日から８月31日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第４回企画展「取手ゆかりの人びとの書」にともない、発行されたものです。

2．この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。

3．この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました。
故海老原光義氏、海老原恒久氏、北川太一氏、黒柳昇一氏、篠田かつ氏、染野修氏、田中邦四郎氏、寺田恂氏、寺田秀也氏、中村春樹氏、平本重喜氏、広瀬誠之氏、村内必典氏、京都国立博物館、京都大学総合博物館、国学院大学校史資料室、品川区立品川歴史館、千葉県立中央図書館、筑波大学附属図書館、東京国立博物館、港区教育委員会、港区立港郷土資料館

沢　近嶺（さわ　ちかね）

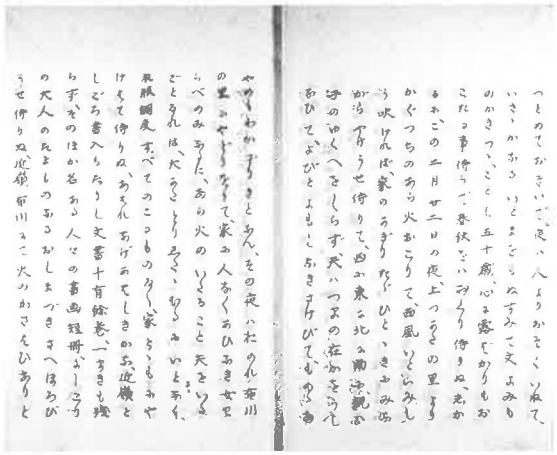
沢近嶺は天明８年（1788）に取手宿に生まれました。本姓は谷沢、幼少のころは吉次郎、定次郎といい、家は食料雑貨を販売する商家で、屋号は油屋、代々与兵衛を称していました。最初は龍ヶ崎の杉野翠兄や取手宿の東春郷に学び、20歳の時に江戸に出て国学者として名高い村田春海の弟子となり、小山田与清、清水浜臣とともに「錦門の三傑」（村田春海の号は織錦斉（にしごりのやのあるじ））と呼ばれ、その名声をうたわれました。

後に取手宿にもどり、家業を営みながら学問や和歌に励みましたが、その境遇は恵まれていたとはいえなかったようです。さらに天保８年（1837）の取手宿の大火で、収集した蔵書や書きためていた原稿をすべて失ってしまいました。失意に沈んだ近嶺でしたが、気を取り直して唯一の著作となった「春夢独談」を執筆しました。しかし『春夢独談』が書きあがると、翌天保９年（1838）に51歳で亡くなりました。

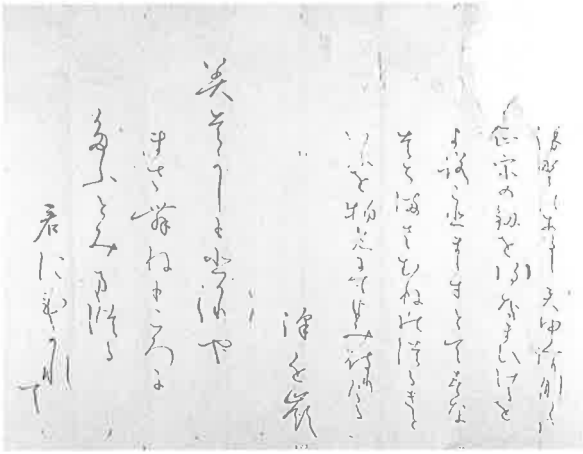
近嶺も江戸に住み多くの弟子を取り、著作を次から次にと出版していれば、もっと有名になっていたでしょうが、取手宿の一文化人として、どんな不遇にもめげず誠実に生き貫いた生涯こそが、人びとの心をひきつけるともいえるのです。墓と昭和18年（1943）に県南読書会によって建てられた歌碑が、念仏院の境内にあります。

（文政５年）閏１月１日 沢近嶺書状（寺田恂家文書）

（天保７年）４月28日　沢近嶺書状（故海老原光義家文書）



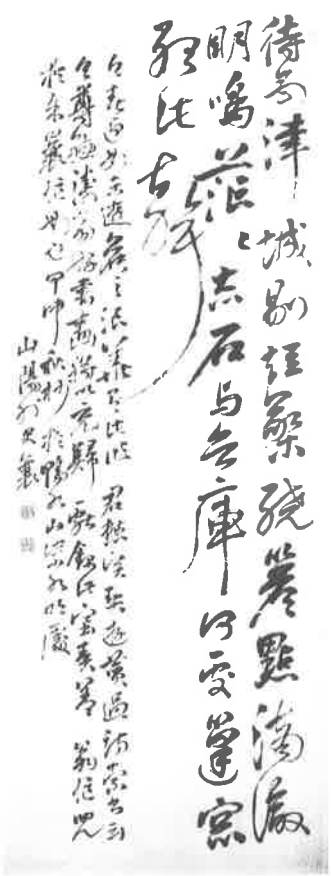
「春夢独談」（千葉県立中央図書館所蔵）



沢近嶺和歌懐紙（染野修氏所蔵）

頼（らい）　山陽（さんよう）

頼山陽（写真提供　京都大学総合博物館）



頼山陽書（取手市教育委員会所蔵）

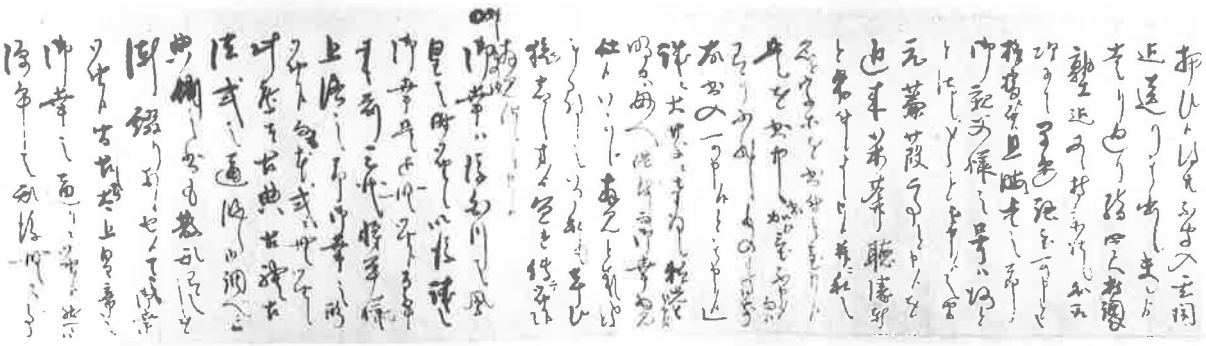
文政7年（1824）９月20日、戸頭村の海老原喜右衛門は、四国の金毘羅参りの帰り道に京都に頼山陽を訪ねました。これは、書画を好む父に、山陽の書をみやげにと望んでのことでした。

山陽はその親を思う孝心に感激して、眼中涙をたたえながら快くその求めに応じたのでした。喜右衛門は、そのことを一刻も早く国元の父親に知らせて喜ばせようとして、その日の内に手紙を書いて出しています。

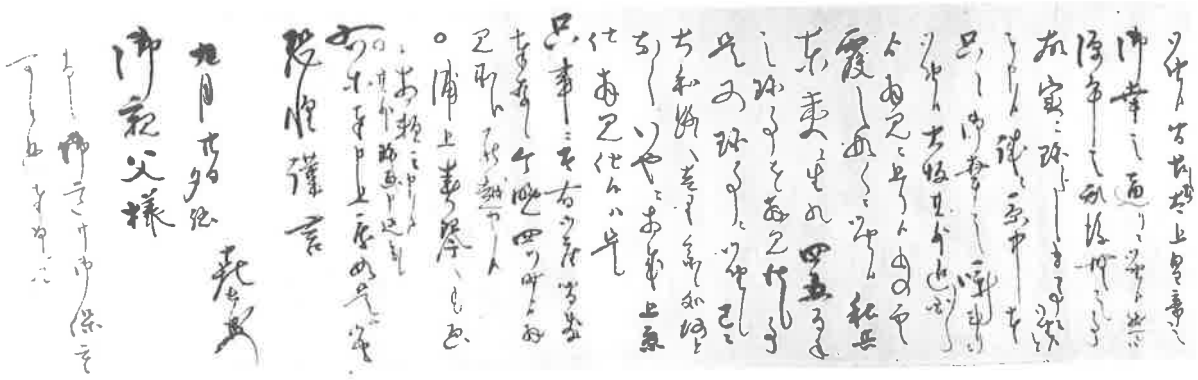
手紙には、喜右衛門と山陽とのやりとりが、会話形式で生き生きと書かれています。遠方から訪ねてきた喜右衛門をねぎらい、差し出した絹が小さいので、紙でよければもっと大きいものに書きましょうと言う山陽。それではもっと大きい絹を入手してまたすぐ持参します、と答える喜右衛門。父や喜右衛門の号を聞き、ありふれたものではいけないと為書を書き加える山陽。この為書こそが、山陽と喜右衛門の出会いを今に伝える貴重な史料なのです。一般的に為書があると、美術品としての評価は低くなると言われていますが、金銭では計ることができない歴史的価値が為書にはあるのです。

頼山陽は、江戸時代後期の儒学者で安永９年（1780）に生まれ、天保３年（1832）に53歳で没しています。源平二氏の興亡から徳川幕府の確立までの武家の歴史を記した『日本外史』は代表的な著作です。また漢詩も多くつくりました。

喜右衛門に贈った書は、文政7年3月に山陽の母が広島から京都にくるので大阪まで迎えに行った時に詠んだ詩です。この詩は、母の乗った船が風雨にはばまれて到着が遅れたので、その身を按じつつ雨だれの音を聞きながらつくったものです。



文政７年９月20日　海老原喜右衛門書状（取手市教育委員会所蔵）



海老原喜右衛門書状ー2

市河米庵（いちかわべいあん）

海老原喜右衛門が頼山陽を訪ねた時に、紹介状を書いたのが市河米庵です。米庵は、安永8年（1779）に生まれ、安政5年（1858）に亡くなっています。「幕末の三筆」の一人と呼ばれる書道家です。海老原喜右衛門は、米庵の父の市河寛斎に、短期間ながら弟子入りしていた関係から、紹介状を書いてもらったのです。山陽と米庵は、当時親しく交友していました。

米庵のこの「閒遊軒」の額も、このような海老原家とのつながりの中で伝えられたものです。海老原家は、代々戸頭村の名主を勤めていましたが、当時の有力農民の子弟が江戸に出て有名な学者に弟子入りして勉学に励んでいた様子が、ここからうかがえます。

市河米庵（写真提供　京都国立博物館）

市河米庵筆「閒遊軒」（取手市教育委員会所蔵）

勝　海舟

勝海舟（写真提供　港区立港郷土資料館）

勝海舟は、幕末から明治にかけて活躍した政治家です。文政６年（1823）に生まれ、明治32年（1899）に亡くなっています。咸臨丸で太平洋を横断したことや、江戸城の無血開城の立役者であることは有名です。

この書は、為書によると明治20年（1887）に、海舟が広瀬氏の嘱（頼み）によって書いたものです。広瀬氏とは、広瀬誠一郎です。

代々下高井村の名主の家に天保８年（1837）に生まれた誠一郎は、初代の茨城県会議員や北相馬郡長などを歴任し、明治20年には利根運河株式会社を設立して、利根川と江戸川を結ぶ利根運河を開削しました。誠一郎は、運河完成を目前にした明治23年（1890）に亡くなっています。

誠一郎のこのような活躍の中から、海舟とのつながりができたものと考えられます。

明治20年　勝海舟筆「独養其志」（広瀬誠之氏所蔵）

重野安繹と土方久元

明治32年　重野安繹筆「清寂養和」（平本重喜氏所蔵）

重野安繹は、文政10年（1827）に薩摩藩の郷士の家に生まれました。薩英戦争の講和談判委員などを勤め、明治維新後は修史局、後に修史館に勤務し東京学士会院の会員ともなり、近代歴史学の導入と確立に大きな功績がありました。東京帝国大学教授や貴族院議員にもなり、晩年は歴史学会の長老として重きをなしました。明治43年（1910）に亡くなっています。

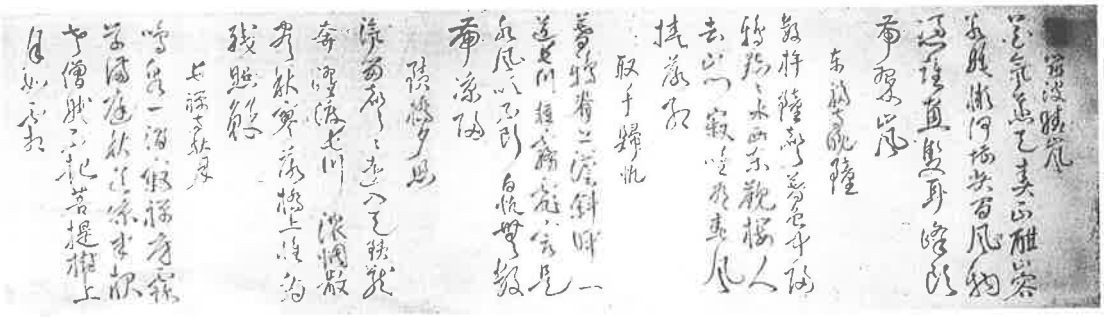
土方久元は、天保４年（1833）に土佐藩の郷士の家に生まれ、尊王の志士として活躍しました。三条実美にしたがい、薩長連合の成立に尽力したりしました。明治維新後は農商務大臣や宮内大臣となって政界で活躍し、大日本帝国憲法の草案の審議にも加わりました。また国学院大学長や東京女学館長を勤めるなど教育界でも活躍しました。大正７年（1918）に亡くなっています。

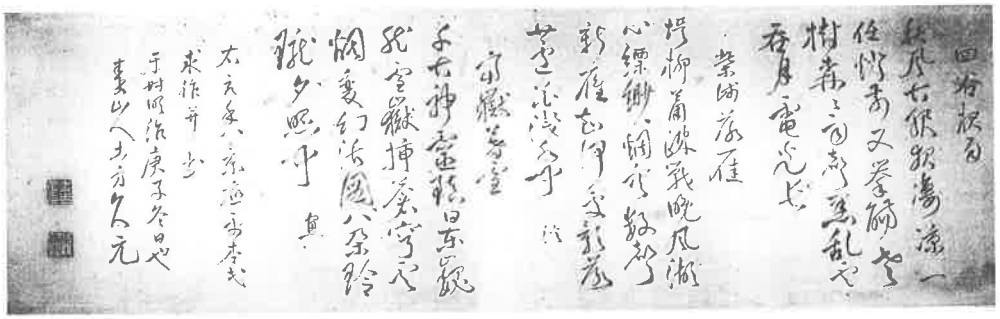
ところで重野や土方は、しばしば吉田村の平本家を訪れています。平本家は吉田村の草分けで、江戸時代のはじめから代々名主を勤めていた家です。取手駅の近くに「三階」と呼ばれた洋館の別荘を持っていて、重野や土方はここに来ていました。このことは、三条実美の家来で幕末には尊王攘夷運動に挺身し、明治維新後は政界や財界で活躍した尾崎三良（さぶろう）の自伝である『尾崎三良自叙略伝』にも、記されています。

当時の中央で活躍した著名な人物と、地方の有力者との交流を物語るものといえます。

重野安繹（『重野博士史学論文集』上、筑波大学附属図書館蔵より）

土方久元（写真提供　国学院大学校史資料室）





明治33年　土方久元筆「取手八景」（平本重喜氏所蔵）

高村光太郎

高村光太郎は、明治16年（1883）に生まれました。父は、明治彫刻界の巨匠高村光雲です。東京美術学校に入学して、卒業後にアメリカやヨーロッパにも留学しました。帰国後は彫刻家としてのほかに詩人としても知られ、妻の智恵子との恋愛時代から結婚生活、そして闘病生活を歌った『智恵子抄』は、あまりにも有名です。

この智恵子の身のまわりの看護をしたのが、智恵子の姪で看護婦の資格をもっていた春子さんです。そしてこの春子さんが、取手の宮崎稔氏の妻となったのです。

今回展示の手紙は、昭和24年（1949）に岩手県の太田村（現花巻市）から取手の宮崎稔氏にあてたものです。光太郎は昭和20年、岩手県に疎開して10月からは太田村の山小屋で独居自炊の生活にはいります。後に東京に戻りましたが、昭和31年（1956）に亡くなりました。

取手と高村光太郎のかかわりについては、まだまだ不明な点が多く、残された資料の調査とその解明は、これからの課題といえます。

昭和26年　岩手県太田村の高村光太郎（写真提供　北川太一氏）

昭和24年２月14日　高村光太郎書簡（取手市教育委員会所蔵）

取手市埋蔵文化財センター第4回企画展
取手ゆかりの人びとの書
平成13年7月3日～8月31日

編集・発行　取手市埋蔵文化財センター
印刷　株式会社あけぼの印刷社